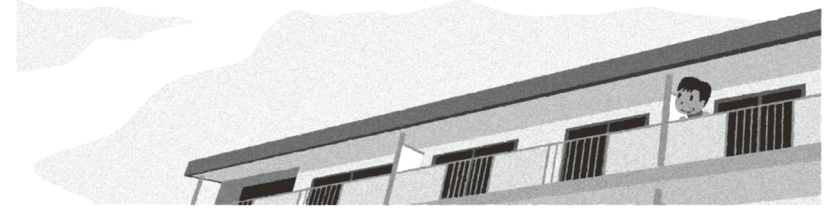


住民たちの「心の鍵」によって開かれる「新しい暮らし」という白いキャンバス

宮城県名取市・市営住宅美田園北団地 (2015年◆平成27年)



20世紀に開かれた東北の空の玄関口が仙台空港だとすれば、東北の海の玄関口は、戦国時代に東北の雄として名を馳せ、仙台藩初代藩主となった伊達政宗によって開かれた貞山堀であった。仙台湾の海岸線の内側を60kmにわたって流れるこの運河は、物資を円滑に輸送するために明治時代にまで及ぶ数百年単位の土木工事によって開かれた海の道だ。

仙台空港も、貞山堀も、ともに宮城県の名取市にある。いわば東北の空と海の玄関口でもあるこの地では、「津波は貞山堀を超えることはない」と言い伝えられていた。

だが、2011年3月11日の大津波は、そんな歴史に根ざした想像力をも凌駕していた。貞山堀を超えた津波によって、名取市では911名の方が亡くなった。

あの日から4年と5ヶ月の月日が流れた。もともと被害の大きかった名取市の閉上地区では、まだ更地が広がるなかに、震災の記憶を語り継ぐ施設「閉上の記憶」が活動を続けている。記憶を受け継ぐことと、新しい暮らしを始めることは、車の両輪のようにしっか

りと結びついている。7月30日。名取市の下増田地区で、真新しい集合住宅の鍵引き渡し式が行われた。その名取市営住宅美田園北団地（名取市への引渡し前は、UR都市機構が下増田地区災害公営住宅として施行）は、これまで仮設住宅に住んでいた人の新生活の場となる、5階建て50戸の新築住宅だ。

集合住宅前のコミュニティ広場に設置されたテントで行われた式典には、西村明宏・国土交通副大臣や、梶原康之・復興庁宮城復興局長も列席。だが、式典の主役はこれから入居する住民たちであることを証明するように、3列に分けられた椅子の真中には、住民たちが着席した。その入居者代表としてスピーチをしたのが、竹内鎌市さん。酷暑をものともしない張りのある声で、こう述べた。

「冬に建設中の囲いのシートの中を見たところ、谷底のような深いところで、作業員の方々が鉄筋を組まれました。やがて春が来て全容が見えたときに、あの地下の膨大な基礎工事の基盤があれば、どんな地震が来ても持ちこた



えてくれるであろうという期待と、その重量感、安定感を心から感じました。また、URの方から住宅の色合いについて、「ここに住む皆さんが明るい気持ちで和やかな暮らしをしていただくために、柔らかなこの色を選びました」と、住む者の心に触れたようなお話を聞いて、本当に感動いたしました。いただいたこの鍵は自分自身の家庭の玄関を開けるだけではなく、共に50世帯の方々が力を合わせて、将来の希望に向かって前進するために、私自身の心を開く鍵として、大切に預らせていただきました。と思います」

そのとき竹内さんたちが受け取ったのは、式典用の大きな鍵。もちろんこの鍵で実際の住居の扉を開けることはできないが、住民にとってその鍵の持つ意味の大きさは、両手にも余るその鍵のモニユ

メントよりも大きかったのかもしれない。

周囲と調和する建物

仙台市のベッドタウンとして発展し、駅やショッピングセンターにもほど近い利便性の高い場所に建設された名取市営住宅美田園北団地。宮城・福島震災復興支援本部住宅整備部・住宅計画チームの佐藤景洋は、プロジェクトを振り返ってこう話す。

「当時URでは、復興スタンダードとして市や町から要請があったときにスピーディーに施行ができるよう、住宅のプランをあらかじめ考えておくということをやり始めていました。ですからこの名取市の建築計画にあたっては、URであらかじめ用意していたプランと、名取市が住民の方に提示して



新居となる市営住宅の大きな鍵を渡される住民代表の方々

いた住宅のタイプをすり合わせることで、いくつかの標準プランを作成していったのです」

住宅に入る予定の人は比較的高齢の方が多くとはいえず、将来にわたって使い勝手のいい集合住宅にするために、ファミリー層にも受け入れられる間取りも欲しい。足の不自由な方のためのバリアフリー住宅も必要だ。そういった要望を取り入れていった結果、和室のあるタイプや、料理をしながら子どもを見守れる対面キッチンのあるタイプ、そして車いす対応のタイプなど、いくつかの部屋の様式を選べるようにする、という計画が固まっていた。

設計計画に携わった宮城・福島震災復興支援本部住宅整備部・住宅建設チームの柏迫俊一が語る。

「苦心したのはソフトとハードの両面で周辺地域とどう調和させるかです。ソフト面としてはコミュニティ形成の一助を目的として、敷地内広場を戸建てエリアに開放した造りとし、『かまどベンチ』『マンホールトイレ』『ソーラー照明』といった防災設備を備えることで災害時には地域の防災機

能の役割を担います。またハード面ではまちなみ形成という点で、先行する戸建てエリアと断絶したまち並みにならないようふさわしい色合いを検討しました結果、ベイスはホワイトとアースカラーとし、新しく生活を開始する方々が明るい気持ちで住んでいただけるように考えました」

新しい生活設計が始まる

式典に参加した佐々木一十郎・名取市長はこう話した。

「駅まで歩いて5分もかからないという他では考えられない立地条件を得たのは一つの大きな成果です。その上、窓や玄関を開けると、エアコンがいらなくらい風が通る。これから先、災害公営住宅から最終的には市営住宅とし維持管理をしていくことになりすが、時代を超えて将来的に快適に暮らせる住環境を整備できたのではないかと思っています」

名取市の復興まちづくり課復興住宅班長の郷内秀稔さんは言う。「私たちも公営住宅の管理はしているのですが、建設経験は20年ほど前にあっさりなので、公営住

宅を手がけるのは私にとっても初めてでした。その点URさんは数をこなしていますから、さすがに知識が広いと思いました。ひとつ聞いても、すぐに返事が返ってくるし、いく通りもの方法を提示してくれるので心強かったです」

今日の入居を待ちこがれていたひとりが條秀行さん。現在仙台空港で働く條さんにとって、空港からのアクセスもいいこの集合住宅は有り難いという。條さんが言う。

「仮設住宅より設備も新しいし、広くなった分、これからの生活の組み立てができる。部屋のなかにもゆったりとしたソファを置こうか、とか、好きなカーテンをかけるようなとか、いまいろいろと考えているところです」

白いキャンバスに新しい絵を描いていくように、名取市営住宅の白い建物にはこれからそれぞれの新しい暮らしが描かれてゆく。住民たちは、ひとりひとりが絵筆を持ったアーティストなのだ。